

「ある」と「ない」の対の困難：プラトン『ソフィスト」篇中央部への接近

納富，信留
慶應義塾大学文学部哲学専攻：西洋古代哲学

<https://doi.org/10.15017/1157>

出版情報：哲學年報. 60, pp.65-90, 2001-03-30. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

「ある」と「ない」の対の困難

——プラトン『ソフィスト』篇中央部への接近——

納 富 信 留

序 問題設定

プラトン『ソフィスト』篇は、哲学者をソフィストから区別するために「ソフィストとは何か？」を探究するといふ、対話篇冒頭に設定された課題を一貫して追求する試みである。このような見通しの下、ソフィストの定義探究が対話篇全体を導き、とりわけ、一般に独立して扱われがちな中央部(236d-264b)の議論がソフィストと哲学者の対比を基軸に構成されていることを、私は拙著『*The Unity of Plato's Sophist: between the sophist and the philosopher*』(Cambridge, 1999)で示した。

本の上梓後、書評会や海外の書評を通じて多くの反応が寄せられたが、そこでの焦点の一つは、私が意図的に解釈を控えた中央部の議論に向けられている。拙著は、外枠部(前半216a-236d、後半264b-268d)におけるソフィスト探究の読解に精力を注ぐ一方、通常は主題と看做される中央部の様々な「哲学的問題」を詳論してはこなかったが、これは次のような対話篇全体への読み筋に基づく。ソフィスト探究の真の意義と論の流れを的確に把握し問題の本質を見極めない限り、そこで惹起される諸問題の位置づけと意義を評価することは不可能であろう。にもかかわらず、解釈者たちは、通常、この枠組みを無視して中央部のみを独立して扱うがゆえに、「ある、ない」や「虚偽」といった問題が、何のために、如何なる文脈で論じられているかを見失い、その結果中央部の意義を正当に評価し得ていない。

彼らは任意の「問題」をテキストから抽出することで、自分たちの問題関心を勝手に読み込んでいるに過ぎず、プラトン自身の真意を掴み損ねている。この欠陥は、解釈の混乱のみならず、議論の非生産性をももたらす。これに対して、私の読解によれば、ソフィストと哲学者の対立と区別という対話篇全体の問題枠組みの中で、一つ一つの問題を精確に見極め位置づける作業が必須であり、そこから中央部への接近が初めて可能となる。他方、残されている中央部の本格的な解釈の成否が、私の見通しの正しさを証すものとなるであろう。

本稿で一步踏み込んで取り掛かるのは、外枠部の主題であるソフィストと哲学者の関係が、「ある」(τόν)と「ない」(τόν)という中央部の主要論題と、直接的に如何なる連関を有するかの検討である。これは、二千年七月二十二日にギリシア哲学研究会主催の拙著書評会において、コメンテーターの一人東北大学の松浦明宏氏の反論によって提起された問題である。松浦氏は、私が基本的な問題枠組みとして提示する哲学者とソフィストの定義の「対」が、果たして中央部における「ない」と「ある」の困難と解明の「対」と重なるのか、という疑問を提出した。この疑問を手掛かりに、中央部の考察を貫く「ある」と「ない」をめぐる考察に分け入っていくことにしよう。

松浦氏の反論は、三つの対性の関係から問題を整理している。

- A、哲学者の定義はソフィストの定義と対を為し、それらの困難も対をなす。
- B、「ある」の困難と「ない」の困難は対をなし、両者は同時に明らかになる。
- C、哲学者は「ある」に関わり、ソフィストは「ない」に関わる。

反論の趣旨は、次の通りである。私はAとBの二つの対性を重ねて論じているが、哲学者と「ある」、ソフィストと「ない」を直接重ねると不都合な帰結が導かれる。即ち、中央部の論究が「ある」と「ない」の結合を認容してい

く議論と、哲学者とソフィストを区別するといふ目的は反対の方向をとり、「ない」も或る意味で「ある」とする中央部の結論は、むしろソフィストが哲学者の類に含まれるとの帰結をもたらす。以上から、松浦氏は、AはBに重ねて扱われるべきではないと主張する。

松浦氏の反論が向けられる立場は、具体的には、拙著の第二章四節が提示するものである。その箇所は、哲学者定義の困難とソフィスト定義の困難が「対」をなすという前提Aを、中央部での「ある」と「ない」の困難の「対」という論点Bに対応する(*correspond*)ものと見做し、BがAを反映する(*reflect*)根拠として、論点Cに言及していた。³⁾Aは私の考察が提出した独自の見解であるが、BとCは、それぞれ250d-251aや253c-254bのテキストに明示されている論点である。私はAとBを平行に扱うが、決して同一視したり単純に重ねている訳ではない。しかし、拙著がこれら対性の関係を必ずしも明瞭にしていなかったことは確かであり、特に、重要なCの解釈をほとんど手付かずのまま残してきた。哲学者と「ある」、ソフィストと「ない」を直接重ねる仕方ではAとBを重ねる場合に生ずる不都合は、松浦氏が指摘する通りである。松浦氏の反論に対して、私は明確な解釈を提示し応答する必要がある。

本稿の考察は、これら三つの対性の関係を出来るかぎり明確化し、外枠部と中央部の繋がりを見極めることに向けられる。まず、(一) 哲学者定義の困難とソフィスト定義の困難が「対」をなすというAの意味を再考する。次に、(二)「ある」の困難と「ない」の困難が「対」をなすというBの意味を考察し、その内実を明らかにする。その際、中央部を独立させる従来の扱いがこの困難の「対」の意味を捉え損なってきたことを示し、「ある、ない」を論ずる中央部の考究の真の意義を照らし出していく。最後に、(三)「ある」と「ない」の対と、哲学者とソフィストの区別との関係を押え、難解なCのテキストへの読解を示す。

本稿の主目的は、プラトンの議論の枠組み、及び、問題の見取り図を提示することで対話篇中央部の読解への糸口をつかむことにある。この論究の過程で現れる多くの更なる問題点は、今後の課題として残される。

一 哲学者定義とソフィスト定義の困難の対

(一) 『ソフィスト』篇の定義探究

最初に、哲学者を定義する困難とソフィストを定義する困難を「対」に捉える、前提Aの意味を再考しよう。

哲学者とソフィストを「対」とする扱いの起点は、対話篇冒頭の問題提起に見られる。哲学者は、ソフィストや政治家として、多様な姿で現れる。これら混乱した現れをなす三者は元来別個の類()をなすと考えられ、それぞれの「何であるか？」に対して探究が必要となる(216a-217b)⁽⁴⁾。この問題提起には、哲学者であるはずのソクラテスがアテナイの人々には「ソフィスト」と現れ死刑に処せられたという、プラトンの生涯に重くのしかかる事実が反映している(『第七書簡』325b-c)。他方で、哲学者が政治家たるべきとの理想の下に、ソクラテスこそ真の政治家である可能性が語られていた(『ゴルギアス』521d)。ソフィストと哲学者の現れの重なりという問題は、ソクラテスという人物をめぐる多様な現れの区別に関わっている⁽⁶⁾。

この問題提起において、ソフィストを定義することは即哲学者の把握となるわけではなく、むしろ哲学者を明らかにする一つの方途と言うべきものであろう。対話篇冒頭でなされた問題提起は、最終的には、続く『政治家』篇の探究をもって完結することになるが、『ソフィスト』篇の考察に限って言えば、ソフィストと哲学者は表裏として捉えられ、前者の定義が或る意味で後者の本質開示をなすと言える。こうした探究枠組みは、外枠部前半の探究における両者の交錯に顕著に示される。ソフィストの第六定義として現れた「高貴なるソフィスト」は、その多くの特徴において「哲学者」たるべきソクラテスを示す疑いを生じさせ、類似と非類似への注意を喚起する(230e-231b)。ここで改めてソフィストと哲学者の違いが追求されることになるが、哲学的たるべき探究が疑わしい結果を生じさせたこと自体、哲学者とソフィストの重なりを交錯した仕方でも示している。

このような二者の現れの重なりの問題を、私は、定義と人の在り方という二つの面での困難として整理した。まず、ソフィストを「非哲学者」として把握し定義する場合、哲学者の把握がソフィスト定義に先行しなくてはならないが、他方で哲学者の把握はつねにソフィストとの対比において、即ち「非ソフィスト」として獲得されてきた。とすると、両者を定義する試みは一種の循環のうちにあることになる。この意味で、ソフィストがまず独立に定義されるという仕方では『ソフィスト』篇を解釈することは不可能であり、少なくともソフィストを規定するのに必要な哲学者把握が、先行的に、或いは、同時に与えられなくてはならない。ソフィストと哲学者の「対」は、両者を定義する試みに、同時に困難をもたらすのである。他方、人の在り方としての困難は、誰がソフィストで、誰が哲学者かとの問いにおいて生ずる。この問いに対して、初期の対話篇はプロタゴラスやゴルギアス、ヒッピアスらがソフィストであり、哲学者とはソクラテスであると自信をもって答えていた。しかし、この答えは、「ソクラテスこそが最大のソフィストである」というアテナイ民衆の思いに対して反対の見方を提示しても、その論拠を与えてはいない。更に、そう論ずるプラトン自身すらソフィストと看做され得る状況において、ソフィストや哲学者のモデルを初めから前提して定義を与えることは許されない。同様に、ソフィストの定義探究を遂行するエレアからの客人やテアイテトスに対しても、とりわけ探究の失敗が明らかとなった第六定義以降、彼らが真に哲学者としてソフィストを捉える資格があるのか問題となる。ソフィストを客観的に定義するためには、その探究自体が哲学者の営みであることが保証されなくてはならない。

ここでソフィストを「非哲学者」とすることは、哲学者ではないあらゆる人々、例えば、医者とか詩人とか一般大衆を含むものではなく、哲学者に見紛われる類似者のみを指す。ソフィストは哲学者として現れる似て非なる存在であり、両者の対性は一種の影像関係と看做される。第六定義がもたらすソクラテスをめぐる厳しい問題状況においては、問いを探究する我々自身の在り方が「哲学者であるか、ソフィストであるか」の二者択一に晒され、そこに他の

選択肢の余地はない。

以上の問題に対して、最終的に「ソフィストとは、何か」を定義した『ソフィスト』篇の試みは、三重の仕方⁽⁸⁾で哲学者の在り方を示している。

(1) 分割法によつてソフィストを定義していく過程で、個々の特徴にはそれに対応する形で、「非ソフィスト」として哲学者が有すべき特徴が示されている。

(2) 対話篇中央部において、ソフィストの反撃が提起する問題を乗り越えるために、探究者たちは「ディアレクティケー」という哲学の方法を解明し、実践的に証示する。

(3) このようにソフィストを定義する営みそのもの、即ち『ソフィスト』篇全体の試みが、優れて哲学者の在り方を示す。

以上のように、哲学者とソフィストを「対」として捉える枠組みが、対話篇の試み全体を成立させている。

(二) 哲学者定義の独立性

ここで、一旦『ソフィスト』篇を離れて、哲学者を把握するために何故ソフィストとの「対」が必要となるのか、を考えてみよう。非哲学者たるソフィストから哲学者を捉えるといった循環を抜きにして、積極的概念である「哲学者」を独立して先行的に定義することも可能ではないか？

そのような哲学者定義の試みの一つとして、『国家』篇第五卷を挙げることが出来るかもしれない。哲人統治者の理想を提案したソクラテスは、「哲学者とは何か？」を示す必要に迫られ、「真実を観ることを愛する人」と規定する(475e)。この哲学者が観取する「真実」とは、「それ自体としてある」イデア(形相)にあたる。続く議論において、哲学者は、「ある」を対象とする「知識」の所有者として、「あり、かつ、ない」を対象とする「思惑」しか持た

ない「見物好きの者たち」(Φιλοθεατικοί, 475d-476b)との区別において呈示され、そのような大衆とソフィストの陰微な関係も後に示唆されている(第六卷492a-493e)。しかし、真実在を観取する者という哲学者定義は、あくまで積極的な規定であり、混同された現れの区別という『ソフィスト』篇の問題とは大きく異なった相貌を示す。もし、このような積極的な哲学者定義が十分可能であれば、プラトンは何故『ソフィスト』篇において、ソフィストからの分別という困難に敢て直面する必要があったのか？

哲学者が真にあるものに関わるという『国家』篇の基本的な見方は、『ソフィスト』篇においてもはっきりと受け継がれている。論点Cのテキスト254a-bで、哲学者は「言論のはたらきによって、つねにあるのアイデアに寄り添って、…その場所の明るさゆえ、決して容易に見ることは出来ない」と語られており、読者に『国家』篇第六、七巻の有名な「太陽の比喩、洞窟の比喩」を想起させる。⁽⁹⁾

しかし、真にあるものを観取する者を「哲学者」とする『国家』篇の規定には、重大な問題が残されている。『国家』篇は、哲学者が関わる対象を「それ自体としてある」アイデア(形相)と指定し、その超越的な実在への哲学者の関わりを「観る」という比喩によって語っている⁽¹⁰⁾。だが、このような語り方によって、哲学者は果たして十全に捉えられるのか？ 『国家』篇中心巻が意識的に多用するこの比喩については、いくつかの疑問が生ずる。

(1) 「観る」という直観的な営みは、言論(ロゴス)を通じて遂行される「ディアレクテイケー」という対話的営みと如何に関係するか？

(2) 「観る」ことが単にそう思い込む「思惑」を越える保証は、何処に得られるのか？

(3) 洞窟の中にいる囚人たちは、如何にして、自らが生き目にする世界が「あり、かつ、ない」影像の世界であること、そして、その外に未だ観たことのない真実在の世界があることを認めるのか？

洞窟の外で真実在を観取するという哲学者把握は、一定の説明機能を有するものの、それ自体批判的吟味に耐える

ものとは言い難い。

これに対して『ソフィスト』篇は、このような語り方に二つの根本的な疑念を投げ掛ける。まず、「ある」という言葉を先人たちが口にして論ずる度にその意味を了解していると思っていた探究者たちは、吟味の結果数多くの困難を明らかにし、先人たちが何を意味しているのか、そして「ある」とは何かを、実は全く理解していなかったことを自覚させられる。他方で、パルメニデスを始めとして「ある」を原理に立てて論じてきた先行思想家たちは、この「ある」について謂わば「物語り」(μῦθος)を子供に語り聞かせるように喋っていたとされる(242c-243a)。「ある」について語る者が、自分だけ分かったつもりで悦に入って真理を語った気になっている状況は、ソクラテスが批判してやまなかつた「知らないのに、知っていると思い込んでいる」無知の姿に他ならない。真実在を観る者として哲学者を把握する立場は、「ある」の意味了解、及び、その語り方についての二重の疑問において、実は「非哲学者」たる危険を孕んでいたのである。この危険性に対して、『ソフィスト』篇は、「あるとは、何か？」を徹底して論究し、それを他ならぬ「ない」との関係で適切に位置づけると共に、そう語っていく正しい言論の術として「ディアレクティケー」の方法を呈示する。

哲学者を独立に定義する試みが逢着するこのような問題に対して、「対」となるソフィストの定義もまた、「ない」との関わりにおいて同様の問題に巻き込まれる。ソフィストは中央部において、「ない」は把握することも語ることのできないと反撃し、ソフィスト定義自体を不可能にしようと挑む。その事態をエレアからの客人は、論点Cの箇所です、「ソフィストは、ないの暗闇のなかへと逃げ込んで、手探りの勘によってその暗闇に身を寄せているのであり、まさにその場所の暗さゆえに、正体を見極めるのが難しい」と語っている(254a)。ソフィストを「ない」に関わる者として捉えようとする試みは、「ある」の場合と同様に、二重の疑問に晒される。「ない」という語を発することによって意味することが語り手自身にも実は全く分かっておらず、かつ、私たちが「ない」について言論で語る可能性そ

のものがアポリアに追い込まれてしまうのである。

以上のように、『国家』篇に見られるような哲学者の積極的定義の試みは、その内実が問い返されることで、ソフィスト把握と並行的な困難を惹き起こし、探究する者自身の認識、及び、語り方への反省を強いる。「真実在を観取する者」としての「哲学者」把握は、その目指す方向は維持されつつも、内容や言論そのものへの重層的な反省を喚起し、再度厳しい考察に晒される。ここに、哲学者定義の困難とソフィスト定義の困難が「対」をなすという、『ソフィスト』篇の基本枠組みが確認された。

二 「ある」と「ない」の困難の対

(一) “対前提”の検討

次に、中央部の主要論題である「ある」と「ない」をめぐる論究に考察を向けよう。

外枠部前半でなされたソフィストの定義探究に対しては、まず、「ない」についての困難という形で問題が提起され(237b-239c)、続いて、それに基づいて「像、虚偽」をめぐる困難が提起される(239c-241b)。その後新たに展開される「ある」をめぐる探究と困難(242b ff.)は、先行する「ない」をめぐる困難とは極めて異なった外見を呈することから、これまで解釈者たちはそれら二つの論述を独立して扱い、個々の論点にのみ解釈を集中させてきた。しかし、この姿勢は、中央部の全体像とそこで追究される二つの論題の関係を見失わせることになる。

まず、「ない」についての論究が完全なアポリアに終わった直後、「ある」の論究へと移行する際に、両者の間に密接で必然的な連関が示唆されている点が重要である。エレアからの客人は対話相手アイテトスに、パルメニデスの言説への論駁を企てても「父親殺し」に取らないでくれと懇願するが、そこで力づくでも立証されるべきこととは、「ないは、何らかの点で、ある」、並びに、「あるは、何らかの仕方で、ない」という両命題であった(241d-242a)。こ

ここで、パルメニデスによって截然と分離された「ない」と「ある」を結合させる探究の目標が、明瞭に呈示されている。この目標の下に取りかかるとき探究は、これまで自明と思われていた「ある」という語（名辞）の意味を問いただしていくことから出発する。そこにエレアからの客人が予感している困難は、実は、先に「ない」について被った困難と等しいものであった。

『ソフィスト』243b-c』

エレアからの客人…現にこの私は、もつと若かつたころは、今我々を困惑させているこの「ない」という事を誰かが語つた場合でも、それを精確に理解できると思つたものだ。しかし今では、そのことについて我々がどれほどの困難に陥っているかは、君も見る通りなのだ。

テアイテトス…たしかに。

エレアからの客人…だから、恐らくは、それに劣らず「ある」に関しても、我々の心の中にはこの同じ状態があるのだが、我々はこちらの方については何の困難もないと称し、誰かがこの語を口にする時には理解できると主張して、ただ他方についてだけ分からないと言っているのだらう。本当は、両者いずれに対しても同様の状態にありながらね。

テアイテトス…恐らくは。

分かつたつもりになっているだけの状態は、決して「ない、ある」に留まらず、「生じた、なる、分離、混合」など他の名辞の場合も同様とされる。「ある」の論究が開始されるこの時点から、それが辿り着くべき困難が「ない」の困難と「対」をなすとの見通しが明瞭に示されているのである。

そして、探究者たちは、「ある」について二元論者、一元論者（パルメニデスら）、物質論者、形相論者らの見解を順次検討しながら、それぞれの論の不整合を突き、彼らが語る言論の意味を自分たちが実は全く分かっていなかったことを明らかにしていく。最終的には、探究を通じて獲得した結論、「あるは、動と静の両方である」との命題が更なる吟味によって否定され、探究者たちは「ある」について思考をどこに向けたらよいのか分からなくなる。そこで以前の「ない」についての完全なアポリアが想起され、「ある」について現在陥っている困難がそれより小さいものとは言えないとして、アポリアの状態が確定される。その時語られるのが、有名な「対前提」(Parity Assumption)である。⁽¹¹⁾

【ソフィスト】250e-251a】

エレアからの客人…では、このこと（「ある」）は、ここで究極の困難（アポリア）に至っていると看做すことにしよう。だが、「ある」と「ない」は等しく困難に与っているので、今期待できることは、そのどちらか一方が今後、曖昧にであれ明瞭にであれ、姿を現すならば、他方もまた、そのように姿を現すだろうということだ。他方、たとえそのどちらも我々が観ることが出来ない場合には、少なくとも我々に出来る限り立派に、同時に両者の間をぬって言論を押し進めることにしよう。

中央部前半は、こうして二つの困難の提示とともに終了する。⁽¹²⁾

「ない」の困難と「ある」の困難が対をなすという「対前提」は、オーエンの命名以来、解釈者たちによってしばしば言及されるが、その内実について真剣に検討されてきたとは言いがたい。⁽¹³⁾ 解釈者たちはこれを、恐らく、二つの困難が出揃ったところでそれらを並置する一種の文学的言い回しと受け取ってきたのであろう。しかし、「ない」

(τόμῳ)の困難が、その概念の特殊性に由来する問題、例えば、「否定」(οὐκ, οὐ)の扱いに存するとしたら、その困難は「ある」の困難とは内容上独立と見做されよう。そのような解釈は、「対前提」を文字通り受け取る立場からは退けられねばならない。二つの困難を「対」として提示したプラトンの意図は、逆に、この対性から両困難の意味を解明する途を示唆しているように思われる。

ここで、「対前提」を呈示するテキストを検討してみよう。そこで示される特徴は、次の通りである。

(a) 「ない」と「ある」は、等しく(εἰς)困難に与る。

(b) 二つの概念の解明は対を為す。但し、これら両者を必ずしも一緒に解明するとの方針を示すものではなく、一方が明らかになる時に、他方も明らかになるという対性が強調されている。⁽¹⁴⁾

(c) いずれも観ることが出来ない場合、両者に対して同時に言論を進めるべきである。

テキストで示される三つの特徴のうち、bとcは一見独立した二つの選択肢であり、(b) 両困難が解明される場合、及び、(c) 解明されない場合、それぞれの対処を示しているかに見える。しかし、これらは決して二者択一の事態ではない。bは探究の結末を示唆するが、この結果が直ちに得られるとは限らず、他方、cは現に直面しているアポリアの状況を念頭において、そこで探究者たちが如何に振る舞うべきかを示すものと受け取られる。cの方針で進められた論究が、最終的にbの示唆する地点にまで到達することも可能なのである。

cにあたるテキスト最後の一文(251a1-3)は、文法的にも解釈が難しいが、現代の研究者たちは概ねキャンベルの提案に従って、拙訳に近く理解している。⁽¹⁵⁾ キャンベルは、伝統的な読み *διωοουεδα* を擁護し、⁽¹⁶⁾ *διωοουεδα* という中性双数の属格を接頭辞 *διωοουεδα* に惹かれたものと説明する。この動詞がそのように、「退ける、避けて通る」を意味す

るのであれば、間をぬうべき「両者」とは「ない」と「ある」の二つの困難を指すことになる。⁽¹⁷⁾ そうしてキャンベルは、「我々は、我々の言論を両者からよけていく」(We shall fend off our argument from both)、「それらを避けて舵を取る」(Steer clear of them)と解し、『オデュッセイア』で語られるスキュラとカリュブデイスという怪物が棲む二つの巨岩の間をすり抜ける航海⁽¹⁸⁾、或いは、「アルゴ号遠征譚」にも登場するシユンプレガデスというぶつかり合う二つの浮き岩の間を進む危険な航海⁽¹⁹⁾がイメージされていると提案する。『ソフィスト』のテキストには、ホメロスらが語るこれらの神話を直接表す字句は見られないが、「言論」(λογος)を進めることを「航海」に喩える表現は、『パイドン』の有名な「第二の航海」等に顕著であり、⁽²⁰⁾ ここでの難解な言い方を理解する助けとなるよう思われる。

もしここでの表現が、二つの浮島や怪物たちの間をぬって進む航海をイメージさせるとしたら、そこに、これ以降の探究の在り方について重要な示唆を見出すことが出来る。⁽²¹⁾ 即ち、二つの困難に直面した探究がそれらの障害を無事通過するには、両者を同時に避けて、その間をぬって進む必要がある。さもないと、対の困難に衝突し、航海が失敗してしまうからである。当面のアポリアを乗り越える方策は、二つの困難を「対」と捉え、その対を避けつつ言論を進める途を探ることなのである。

探究者たちが陥っている困難(アポリア)の状況は、次の仕方で回避が図られるべきものである。

(1) まず、「ない」の困難をもたらした「ない」は、それ自体では、考えられることも、語られることも不可能である」という帰結(238c-239a)、並びに「ある」の困難を招いた「あるは、静と動である」という結論(249c-d)は、

共にそれ自体としては誤った命題である。

- (2) これらの誤りは、その結論を導く何らかの前提、或いは、推論の過程が持つ問題に起因する。
- (3) 誤った結論は単に除去されて済むものではなく、それに至った立場の不十分さの解明が必要である。
- (4) 全体として、これらの困難を回避する新たな探究の基盤を整備しなくてはならない。

二つの困難がもたらす破滅的な結果を避けるためには、議論の出発点に立ち返り、その何処に根本的な問題があったのかを見極めること、つまり、困難を帰結させた原因を観取し、その基本的問題を解決することが必要となる。二つの困難が「対」とされることから、それらの原因も何らか「対」をなす、もしくは、それらに共通する単一の原因が存する可能性が想定される。

(二) 言論の可能性

「ない」の困難と「ある」の困難を「対」にすることにより、中央部前半のアポリアが完結し、後半ではアポリアを克服する新たな探究が遂行される。その探究の始まりで、「同じこのものが、多くの名辞で呼ばれるのは、如何なる仕方によるのか」を語ることが求められる(251a)。ここで「名辞」(ὄνομα)の問題が取り上げられるのは、一見唐突で、前半の論究とは独立であるように見える。しかし、実はこれこそが、対の困難の根源を洗い出すために用意された周到な試みなのである。

「ない」をめぐる論究、及び、「ある」の意味の吟味においても、「名辞」にまつわる論点が提出されていた。例えば、「一が、ある」と語る一元論者たちへの最初の批判的検討は、彼らが同じものを「一」と「ある」という二つの名辞で呼ぶこと、更には、そもそも名辞(ὄνομα)と事物という二つのものを立てること、彼らは自らの前提たる一元論に反していることを指摘していた(244b-d)。これは、「ある」を検討するごく限られた局面に過ぎないと思われるかもしれない。しかし、「ない」と「ある」という論題をめぐる議論は、そもそも、我々が発語する「ない、ある」という名辞によって我々は何を理解しており、また、それについて言論が如何に成立するかを問題としていた。「ない」をめぐる議論は、その第一段階が明示的に「この「ない」という名辞を何処に帰すべきか」(237c)という問いから困難を導出しているように(237b-e)、全体としてこの意図を明らかに示している。対の困難が提示される前半の結

論で、エレアからの客人は、「ない」という名辞を一体何に帰すべきかを尋ねられた我々が、完全な困難に捉えられたこと」を想起させる(250d)。直接には「名辞」を明示的に問うた第一の困難(237b-e)を指すように見えるこの表現は、「ない」と「ある」の困難を対にするそこでの文脈が示すように、むしろ「ない」をめぐる困難の全体(237b-239b)を指すと考えるべきであろう。「ない」の思考不可能性・言表不可能性を帰結する究極の困難とは、広く「ない」という名辞をめぐって直面する、「言論」(λόγος)の可能性の困難と言うべきものである。

しかし、名辞をめぐって浮上したアポリアとは、何なのか？ パルメニデスの「真理」は、周知のように、「一あり」以外の如何なるものも認めず、その帰結として世界の諸事物の生成変化や多元性を断固否定したのである。その立場は、結局、言論を語ること一般を危機に晒す。そして何より、こういったパルメニデスの立場に依拠して「ない」の把握不可能性を主張するソフィストの反撃こそは、探究者によるソフィストの「定義」(λόγος)と、哲学者が持つべき探究の「言論」を、共に不可能にしてしまう。

「ある」をめぐる論究においても、我々が一体如何に言論を用いて「ある」を捉えようとするのかが問題となっていた。例えば、物質論者の吟味において、探究者たちは、まず、「死すべき生き物が、なんらかある、と言うかどうか」を尋ね、そこから「魂、正義や思慮等の徳が、ある」ことを認めさせていく(246e-247c)。また、形相の友に対しても、彼らの言論の真意を問うことから、「生や魂や知性、そして動が、ある」との結論を導く(248c-249b)。このでの探究は、我々が名辞「ある」を発語しつつ事態を捉える現場を押さえて、言論を通じて世界と如何に関わるかを見ることで、言語使用から存在理解への途を披こうとするものである。その結果、四つの代表的な立場を批判した探究者たちは、吟味を通じて到達した帰結を統合して「ある」を言論で立派に捉えたと思うが(249d-e)、更なる吟味によってその思いは一転して困難に晒される。中央部前半の論究は全体として、「ある、ない」という名辞を用いる我々が、それによって如何なる言論を語りうるかの吟味に他ならない。

名辞は何かを指示する。しかし、「ある」という名辞において我々は一体何処に思考を向けているのかが問われた時、「ある」の困難は確定的となる(250c)。パルメニデス、エムペドクレス、物質論者ら先人たち、そして、アイデアを論ずるプラトン自身も、「ある」をめぐるこれまで様々な思索を繰り広げてきたが、誰一人この「ある」を適切に捉えることも、それについて真に「言論」を語ることに成功してはこなかった。しかし、もし「ある」について「言論」を十全に成立させることが出来ないとしたら、こうした哲学の営みそのものが不可能となってしまうのではないか。こうして中央部後半の論究は、「ある、ない」という「名辞」から出発しつつ、「少なくとも我々に出来る限り立派に、両方の間を同時にぬって、言論を押し進めること」を追求していくのである。それ以前の探究が陥った困難は、「ある、ない」をあくまで「名辞」として扱い、それが指示する対象を探し求める仕方に由来していたと考えられる。「ある、ない」という「名辞」に関しては、如何に「言論」が成立しうるかが、根本的に問い直されねばならなかったのである。対の困難を受けて、論究は、「名辞」から「言論」へと基点を移行させる必要性に直面している。

同じ対象を多くの名辞で呼ぶことは、我々が言論を語る基本である。⁽²²⁾これに対して、一と多をめぐる困難からその可能性を否定し、「人が、善い」といった言表(λόγος)を認めずに、「人」は「人」、「善い」は「善い」として悦に入る「晩学者たち」(ἀφρονεῖς)は、言論の本質を理解せず、言論の可能性を否定して喜ぶ「生まれ立ての赤子」に等しい存在なのである(259d)。彼らは「言論」を、すべて「名辞」の構造、即ち、名辞とそれが指示する対象との一対一の対応関係として理解していると推定される。そこでは、同じ対象を一つの名辞で呼ぶことしか許されず、その対象に多くの名辞を帰すことによる「言論」の成立は否定される。それに対して、このような極端な立場に言及しつつ新たな探究を始める試みは、「ある、ない」を言論で捉える際に生じた対の困難が、そもそも「語ること」(λέγειν)、即ち、「言論」(λόγος)が如何に可能かという根本問題にあることを見据えて、そこから打開を図る周到な戦略に依

扱っている。また、反対に、「言論」を否定する稚拙な立場を撃破してその可能性を確保する試みは、それ自体が「ある」と「ない」の正当な把握を基礎として成立することが判明する。ここでは、対の困難を避けつつ「言論」の可能性を確保することが、「言論を押し進め」、そこに「ある」と「ない」の両者を言論において解明する途を披くことになるのである。

探究者たちは、この議論がかつて「ある」を論じてきたすべての人々に向けられるようにと、名辞の「結合」に焦点をあてて吟味に取りかかる(251c-d)。これまで論じられた「動、静、ある」という名辞が表す類が、(I) それぞれ互いに全く結合しないか、(II) 全てが相互に結合しあうか、(III) 或るものは結合するが、或るものはしないか、の三つの選択肢を呈示し、その一つを選んでいく。⁽²³⁾

まず、(I) 如何なる点においても、いずれもが何一つ結合しないとすする立場に立つと、これまで「ある」をめぐる様々に論じてきた人々も「何々が、ある」との自論を語ることができず、「何一つ語ってはいない」(ὁδοὺν λέγειν)ことになる(252b)。とりわけ、このような立場に立つ「晩学者たち」こそは、最も滑稽な仕方で言論を追求したことになる。というのも、彼らは「他のものから／離れて／それ自体で／ある」といった自らの立場を「言論」として結び付けて主張することすら出来ずに、腹話術師エウリュクレスのように自分自身と相対立する直中にいることになるからである(252c-d)。これを「全分離主義」の失敗と名付けることにしよう。次に、(II) 全てを全てと結び付ける「全結合主義」の立場は、「動が、静止する」とか「静が、動く」というように、正反対のものさえ結び付ける不合理を犯すことになる。そのような事態は不可能であり、この不合理を犯すことは、言論を混乱させる類を同一のものへと還元してしまう。とすると、残されたのは、(III) 或る類は或る類と結合するが、或る類は或る類とは結合しない、といった適切な関係を認め、それを探究する第三の途となる。これを「適正結合主義」とする。さて、「全分離主義」と「全結合主義」という両極の立場を避けつつ、その中間に「言論」の可能性を確保しよう

とするこの試みは、対の困難をぬって「言論」を進めていく「対前提」の方針に適合するものである。では、ここで退けられる二つの極端な立場は、「ある」と「ない」の対の困難と如何なるつながりを有するのか。

まず、「ない」の困難の起源は、「ない」を「ある」に決して結び付けてはならないというパルメニデスのテーゼにある。この原則によって、「ない」には、数を始め如何なる性質も帰されることなく、更には、「ないは、思考できず、言表できない」という帰結を述べることさえ自己矛盾を招くとされる。「ある」のみを「ある」とし、「ない」は「ない」と退けて、両者を決して結び付けないパルメニデスの立場は、こうして、一方では「ない」の把握不可能性の困難を招来するが、他方では、彼の中心主題である「ある」の把握にも支障をきたす。パルメニデスの立場に対しては、前に言及したように、名辞と事物に関する一元論の破綻が指摘されていたが(249b-d)、それ以上に、彼の立場は「言論」の適切な成立そのものを困難に陥れる点で、基本的に「晩学者たち」の態度と共通性を有している。「ない」と「ある」の結合を一切拒否するパルメニデスは、「ある」の純粋性において他の多くの物事が「ある」とすることを否定するが、それは、彼が反対する多元論が、とりもなおさず「ないは、ある」という混同を容認する立場とされたからであつた。⁽²⁴⁾

「ある」をめぐる困難は、直接には、「あるとは、何か？」を問い求めていく過程で「あるは、動と静の両方である」との結論を子供の願いのように認め(249c-d)、これらを安易に結び付けた立場の不十分さに起因する。その結論は、これらの概念の結合を通じて、「静が、動く」や「動が、静止する」というおよそ有り得ない事態を導くのであり(250a-b)、これは「全結合主義」の帰結に対応している。「全分離主義」と並んで、「全結合主義」の失敗が、「ある」の困難をもたらしていたことが判明する。

「ある」と「ない」の間に適正な結合関係を認め得るかという問題は、決してこれら二つの特定の概念間の関係に留まるものではなく、およそ「言論」が可能となる地平とは何かを根源的に問う、対の問題であつた。これが、名辞

の結合による言論の成立から、それまでの「ある」と「ない」の議論を根本的に問い直す試みなのである。「ある」と「ない」については、極端な「全分離主義」と「全結合主義」を同時に回避することにより、その間に適切な結合と分離の関係を見出すことが求められる。他方、最大類をめぐる「言論」の可能性、とりわけ、「ないは、ある」「あるは、ない」という命題が如何に可能かを見極めるディアレクティケーの営みこそは、そこで結合原理としての「ある」と分離原理としての「ない」⁽²⁵⁾を位置付ける、「言論」成立に向けての論究に他ならなかった。この見極めの成否が、言論を確保し、同時に、「ある」と「ない」の把握そのものを可能にする。それゆえ、エレアからの客人は、後に、適正な結合関係を認めたここでの探究が「言論」の可能性、ひいては「哲学」そのものを救ったと評価するのであった(259d-260a)。中央部前半で、言論による探究の対象であった「ある」と「ない」は、それ自体が「言論」の可能性の根拠であり、従って、探究そのものを成立させる根拠であることが判明する。「ある」が把握されるのは、パルメニデスが志向した単独者においてではなく、「類の織り合わせ」(συντακτὴ εἶδος)としての「言論」においてのみであること、そこでは「ある」と「ない」が共に適正な結合において捉えられるべきことを、プラトンは示した。ここでは、探究が一方で確固として成立する中で「ある、ない」という名辞の対象が問われるのでは決してなく、むしろ、探究という言論の在り方そのものが問われている。そこに、「ある」と「ない」の対の困難の本質があったのである。

三 「ある、ない」の対と哲学者、ソフィスト

(一) 第三の途としての哲学

これまでの考察を受けて、「ある」と「ない」の対の困難を乗り越える探究の営みが、哲学者とソフィストの区別という対話篇の主題と如何に関わるかを確認することにしよう。ここでは、結合と分離に関して哲学者とソフィスト

が如何なる立場に立つか、を問うことから始める。

まず、適正な結合と分離を見据える知識（術）が、自由人たる哲学者に帰せられ、その知は「ディアレクティケー」と呼ばれる（253b-e）。そして、直後の五つの最大類をめぐる議論が、そこで素描されるディアレクティケーの実質を具体的に展開し、「適正結合主義」を実現している。これに対してソフィストは、パルメニデスのテーゼたる「ある」と「ない」の断絶に依拠して「ない」のアポリアを作り成す点で、「全分離主義」をとるものと考えられる。また、一と多のパラドクスを用いて「言論」を否定する「晩学者」としてプラトンが念頭においていた可能性が高いアンテイステネスは、ソフィストと同様に、「反論することは、不可能である」（οὐκ ἔστιν ἀντιλέγειν）と唱えたとされ、ソフィストと「晩学者たち」の類縁性が推測される。²⁶ 一つの名辞Xの対象をその同じXでしか呼ぶことを許さないアンテイステネスの「全分離主義」的立場は、当然、相対立する命題を許容しないからである。ソフィストは、他方で、あらゆる結合を認めて言論を上へ下へと混乱させる立場にも立つ。単純化されたプロタゴラスの相対主義において「Xである」と同時に「Xでない」ことも成立可能とされ、そこに観点の相違を適切に見て取らない誤りは、「全結合主義」の何でもある、の世界を帰結する。一言でいうと、何も語れないとし、何でも語れるとする二つの相反する極論は、実は、ソフィストの主張として表裏をなしている。ソフィストはこの両極の立場、即ち、「全分離主義」と「全結合主義」を武器として適宜利用しながら、相手を困難に陥れ、「言論」と「哲学」の可能性そのものを否定する。これに対して哲学者は、この両極の間に適正な針路を見定め、「言論」の可能性を確保しながら言論を押し進めていく。この適正さを司るのが、哲学者が持つべき知としての「ディアレクティケー」なのである。

ここに、本稿冒頭での問題設定、即ち、(A) ソフィスト定義と哲学者定義の対の困難と、(B) 「ある」と「ない」の対の困難との関係について、一つの見通しを得ることが出来る。外枠部前半の議論において「ソフィスト」の定義探究が行き詰まった時、その定義によってソフィストから区別されるべき「哲学者」の把握も困難に陥った。ソフィ

スト定義を行き詰まらせた直接の原因である「ない」の困難は、類の間の適正な結合関係を認めないという本質において、「ある」の困難と等価であった。それら二つの困難は、両者の間を切り抜ける第三の途、即ち、適正結合主義を実現するディアレクティケーを見据えることで、同時に乗り越えられ、その探究は「ソフィスト」定義を可能にすると同時に、「哲学者」そのものを浮かび上がらせるのである。

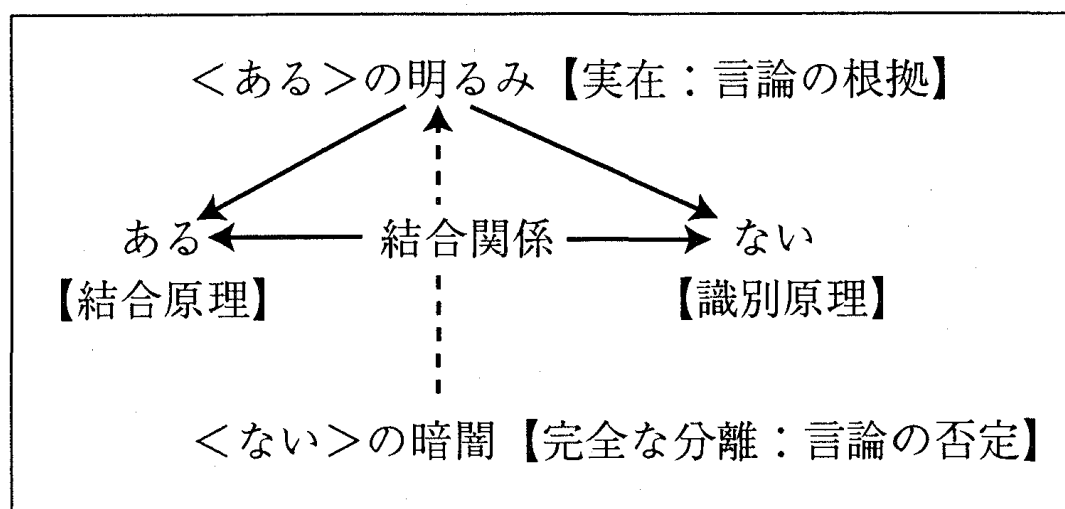
(二) 実在への関わり

最後に、類の間に適正な結合関係を認める第三の途が、如何に哲学者を成立させるか、他方で、退けられるべき極端な対の立場が如何にソフィストの本質をなすか、の実質を考察しよう。

「ある」と「ない」の間に適正な結合を認めることは、ソフィスト定義が陥った困難を乗り越える一つの決定的な途を披く。外枠部前半の探究でソフィストが準えられ、中央部でソフィストによる反撃が向けられた一つの焦点は、「像制作」という概念であった。探究者たちはソフィストを「現像(誤った像, εἰκασμα)を制作する者」と定義しようと試みたが、ソフィストはそもそも「像」などというものは存在し得ないと開き直り、その理由を、像の定義「Xではないが、Xでないものではなく、Xである」が、パルメニデスの禁ずる「ある」と「ない」の奇妙な結合を含意することに求める(239c-240c)。こうして「像」存在を否定することにより、ソフィストは、そもそも像と実物という区別は存在せず、あらゆるものが実在であると主張する。これに対して、「ある」と「ない」が適切な仕方⁽²⁷⁾で結合し得ることを示す中央部後半の探究の目的は、「像」の定義(νομος)を救済し、その帰結として「像」が存在することを認めることにある。このことは、同時に、像を像たらしめる「実物」が存在することを十全な仕方⁽²⁸⁾で認められたことになるであろう。「適正結合主義」は、像を或る種の「ない」ものとして認容することで、「ない」ものを「ない」ものたらしめる真正の「ある」を確保することに成功するのである。

「像」の存在を一切否定し全てを「実在」とするソフィストの立場は、「ない」を隔離する「全分離主義」であると同時に、すべてを「ある」としてしまふ「全結合主義」をも内包する。ソフィストは「ない」について語る一切の途を退けることで、実は暗闇としての「ない」に身を潜めようとしているのである。そこで見失われるのは、ソフィストが依拠する「ない」と同時に、それを「ない」ものたらしめる真正の「ある」である。これに対して、「適正結合主義」こそが、像を成立させる根拠としての「ある」を、「ある」と「ない」の結合関係において観取する哲学者の立場である。哲学者は「ない」を「ある」との適正な結合関係の下で捉えることにより、ソフィストがどこに逃げ込んでいるかを精確に見極め、彼らが隠れる暗闇たる「ない」を真正の「ある」の光りの下へと引き摺り出す。こうして哲学者は、言論の明るみにおいてソフィストを「像制作者」として捕縛することに成功するのである。

以上から、Zenoにおいて哲学者が関わりと語られる「ある」は、「像」との関係における「実物」に当たるものと推定される。パルメニデスら思索者たちがこれまで思考を向けて把捉しようとしてきた「ある」は、実は、他の類との結合においてある。つまり、類の結合を認める根拠としての「ある」の働きが、「ある」自体を「ある」ものたらしめる。従って、適正な結合関係を通じてすべての「ある」ものを捉える根拠が、言論と哲学探究を可能にする根拠としての「ある」なのである。他方、ソフィストが身を潜めようとする「ない」は、完全な分離によって孤立させられ、「言論」を不可能にする暗闇である。それをも



「ある」とする、哲学者の関わるへあるへこそが、ソフィストが分離し混同して操る「ある」と「ない」を、適正な「対」として位置づける。

「ある」と「ない」を「対」として扱う探究そのものが、こうして、哲学者によるソフィストの捕捉となるのであり、両者の関係の本質を表現している。

終 残された課題

本考察を通じて残された課題は、次の三点である。

一、中央部の論究が可能性を確保した「類の織り合わせ」(συμπλοκή εἶδων)としての「言論」(λόγος)とは、「原言論」とでも呼ぶべき、類(概念)の間の本質的關係を表示する命題と理解される。その「原言論」の基盤の上に、我々が世界の諸事態について語っていく一般の言論が可能となる。これが、「テアイテトスは、座っている」といった「言表」(ἀφορμή)であり、中央部最終節において「名と述べの結合」として分析されることになる。これら「言論」についての二つの考察場面の間の關係は、今後の検討に委ねられる。

二、像を像たらしめる「実物」としてのへあるへは、似像と現像の区別の規準であり、また、現れの真偽の規準にあたる。⁽²⁸⁾ 解釈者たちは、これまで、異なった用法において動詞「ある」を分類することに専念していきしたが、私はこの語が用いられる文脈や位相の区別こそがより重要であると考える。様々な「ある」ものども、結合原理としての「ある」、実在としてのへあるへは、異義というより、異なった位相に現れる「ある」の三つの相貌と想定される。しかし、それらの關係は今後の課題に残されている。

三、中央部前半で「ある」の対とされる「ない」(μη ὄν)は、後に、「あると、異なる」(ὁἀρεπον τοῦ ὄντος)と分析され、「ある」と「ない」の対が「異」という対置(ἀντιθεσις)の形で捉え直される(257c-258b)。この議論の解釈

も、今後の課題としたい。

注

1 原語の“*tò òv*” “*tò mh'òv*”は、文字通りには「あるもの」「ないもの」を意味するが、これらは“*èotiv*” “*òuk èotiv*”という述語を名詞化したものであることから、「ある」「ない」と訳す。日本語訳では、“*tò mh'òv*”に「あらぬもの」という表現を充てることが一般的であるが、私は日本語による思索として自然で哲学的にも重要な「ない」という語を選んだ。

また、ほとんどの解釈者たちが「ある」(*èiva*)という動詞の用法区別の問題に拘泥し、プラトンが論ずるのが「完全用法／不完全用法」のいずれか、そこで区別されるのが「存在／述定／同定」のいずれの意味か、に議論を集中させている。しかし、このようなアプローチは、プラトンのテクストに我々の枠組みを不当に押し付けるものであり、本論が全体として明らかにするように、それ自体非プラトンの態度と言わねばならない。私はむしろ、プラトンが「ある」と「ない」を如何なる問題として扱っているかをそのまま捉え、そこから問題としての、「ある、ない」の実質へと接近していく方途を採りたい。

2 松浦明宏「Parity Assumption(「あるとあらぬは同時に明らかになる」(250e1-251a4)と「哲学者定義とソフィスト定義の同時性」)との関連性について」。但し、本稿では、その議論を私なりに言い換えて紹介する。例えば、松浦氏は、次に述べるAとBの対性を私が「同一視している」と看做して反論するが、私はそもそもそのような強い見方を取っていないことから、ここでは「重ねている」と言い換えた。

3 拙著、七一―七二、及び、二九八―二九九頁。

4 これらが三つの独立した類をなすことへの疑問は、拙著二二頁参照。

5 『国家』第五卷473b以降、『第七書簡』326a-b参照。

6 拙著、六四―六八頁参照。

7 拙著、七一―七三頁参照。

8 拙著、二九六―三〇一頁の結論を参照。

9 もっとも、『国家』篇で「太陽」に喩えられる「善のアイデア」は、「存在を超える」(*ènèkeiva tñs ovótias, 509b*)ものとされ、新プラトン主義者たちが強調するように、「あるのアイデア」はそれに準ずるものに過ぎない。

- 10 第五巻で「真実在を観る」(θεῖν, ὄραν, καθορᾶν, θεοθεῖν)と表現され、第六く七巻の「太陽の比喩、洞窟の比喩」においても顕著なこの語り方は、他にも、第六巻484c-d(盲人との対比)、500b-501c(神的範型を用いる画家)等の箇所で見られる。
- 11 G. E. L. Owen, "Plato on Not-Being", G. Vlastos ed. *Plato: A Collection of Critical Essays I: Metaphysics and Epistemology* (Notre Dame: 1971), 229-231; repr. *Logic, Science and Dialectic: Collected Papers in Greek Philosophy*, ed. M. Nussbaum (Ithaca: 1986), 108-109 参照。
- 12 対前提¹⁶が示唆されるテキストとしては、本文や言及・引用した241d, 243b-c, 250e-251aの他に、245e-246a, 254cがあり、256e, 258a-b, 262cの箇所も内容上関連する(cf. Owen, op. cit., 229)。
- 13 オーエン自身は、対前提¹⁶に依拠して、「ない」と「ある」の両者における動詞「ある(εἶναι)」が同じ不完全用法でなければならぬとの解釈を示し、モラフチクらに代表される、「ない」においては存在(完全用法)が、「ある」においては述定等(不完全用法)の混乱が問題となるといった伝統的解釈を批判している。
- 14 オーエンによる、対前提¹⁶の定式¹⁷ 'the one cannot be illuminated without the other' (op. cit., 230)はテキストが語る通りではないが、論理的にはこのことが合意されていると言っている。
- 15 L. Campbell, *The Sophists and Politicus of Plato*, With a revised text and English notes (Oxford: 1867; repr. Salem: 1988), Sph. 135-136. 参照。
- 16 "δυστόμεθα"と"δυσθεύω"の中動相(force one's way through, break through)の語。
- この写本の読みに対しては、(i) "δυστόμεθα" (Wagner: "διατρέπω" (bear to the end, go through with)) (ii) "δυστόμεθα" (Heindorf: "δύκω" (pursue an object, seek after)) (iii) "δυσσωτόμεθα" (Stalbaum: "διασώζω" (preserve through a danger)) (iv) "δυσθητόμεθα" (C. F. Hermann: "διατίθειαι" (arrange or settle mutually, set forth))とした改訂が提案されている。しかし、私は写本の伝統に従い、キャンベルの解釈の線で理解していく。尚、デモクリトスの断片DK68 B191で、この動詞は、対格を伴い「少なからぬ欠陥を退ける」という意味で用いられている。
- 17 但し、「両者」(ἀμφὼ)が中性形であるのに対して、「困難」(ἀπορία)は女性形であることから、直接には「ある」と「ない」との二者(中性形)を指示する方が無難である。
- 18 ホメロス『オデュッセイア』第十二巻七三二-七三六、二二二二-二二六二参照。

- 19 アポロドロス『ギリシア神話』第一巻九・二二参照。古くは、ホメロス『オデュッセイア』第十二巻五九―七二にも言及がある。
- 20 『パイドン』85c-d(言論の筏による航海)、99c-d(第二の航海)参照。
- 21 他方、F. M. Cornford, *Plato's Theory of Knowledge* (London: 1935), 251は、この箇所を「両手で捕まえる」比喻として解釈する。その比喻は、確かに、226a, 231cで用いられているもの、この箇所の解釈としては一般に退けられている(cf. Owen, op. cit., 230, n.16)。
- 22 ここで「人が、善い」といった言表(λογος)は、未だ「主語／述語」(名ὄνομα／述べῖνμα)として分析されておらず、二つの「名辞」間の関係としてのみ捉えられている。
- 23 私が「結合」と呼ぶ関係は、対話篇では「結合する、混合する、混じる、調和する」といった様々な表現で呼ばれる事態の総称である。拙著、一三三頁、註四三参照。
- 24 ゼノンによる多元論批判の展開を参照。
- 25 但し、「ない」(μη οὐ)は、この後の分析により「あるとは、異なる」と把握され、すべての全体を貫く「異」の類が分離原理と看做される(253c, 255e)。
- 26 アンティステネスの思想については、アリストテレス『形而上学』第五卷二九章1024b32-34、第八卷三章1043b23-28を参照。また、C. M. Gillespie, "The logic of Antisthenes", *Archiv für Geschichte der Philosophie* 19(1912), 479-500, 20(1913), 17-38にアンティステネスの立場を基本的にソフィストと対比している。
- 27 像の定義とそれがもたらす困難については、拙著、一五五―一六二、一八九―一九二頁参照。
- 28 この基準(criterion)を拙著では"reality"(実在)と呼んだが(二〇〇、二二八―二二九、二七九頁)、その扱いには更に慎重さが必要である。